

言葉にならない子どもの声を聴く

1 一つの出会いから

S市の学校訪問を終え数日経ったある日、1通のメールが届いた。数日前の学校で初めて会った人からだった。とは言っても、その人からすると私とは初対面ではなかった。今年の夏に開催した「授業づくり・学校づくりセミナー」でその人がオンライン参加していて、私の話も聴いていてくれたからだ。

実際に顔を合わせたとき、彼は、ただ自己紹介のような話をしただけでなく私の考えを聴かせてほしいと言った。それは、夏のセミナーにおいて私が語った「言葉にならない子どもの声を聴く」ことについてだった。

その時は、詳しく話す時間がなく、もの言わない、または言えないでいる子どもがいたら、その子どもに寄り添ってその子の思いを汲み取るように心掛けるし、日常的に子どもとの間で文章によるやりとりをしていれば、その子どもの書いていることから推し量ることもできるというようなことを話ただけだった。

今回のメールを読んで、そのときの私の言葉だけでは、今、その人の心を占めている知りたいことを満たすには足りなかったということがよく分かった。それほど書かれていることに真剣味があった。それは、「もの言わない子ども」に対して並々ならぬ思いを抱いておられることを表していた。

私は、そのメールを身の引き締まる思いで読んだ。そして、この人の思いに応えなければならないと強く思った。

2 言葉にならないものを大切にすると語った私の真意

セミナーにおいて、私が述べた「言葉にならない子どもの声を聴く」ということは、セミナーで見せていただいた物語を読む授業映像から、そのことを強く感じたからであった。

映像の中の子どもは、物語の文章に触れて感じたこと気づいたことを生き生きと語っていた。しかも、どの子どもの語りも長く詳しい。それは、語ることのうれしさに満ちているように思えた。

話すということは、聞いてくれる人がいて成り立つ。だから、こんなにもしっかり語ることができるのは、授業をしている教師がとてもよい聞き手になっているからにちがいない、そう思った。もちろん、教師は、自分が聞くだけでなく、学級の子どもたちみんなをよい聞き手に育てているのだと思う。だから、こういう学級をつくった教師の努力と熱心さは言を俟たない。

にもかかわらず、セミナーの場で指名を受けた私は、そういうことには触れず、「言葉にならない子どもの声を聴く」ということについてだけ語ったのだった。それは、あのとき、次の二つのことが頭をよぎったからである。

一つは、物語の読み味わいとして違和感を抱いたからである。文学（物語）は、言葉によって表現された芸術作品である。だから、作者は、どういう言葉・文によってどういう世界を表現するか、考えに考える。一つの作品を書き上げるまで、作者は言葉の世界に没頭する。無駄な言葉があってはならない、冗長な文章にしてはならない、どんな言葉で表現すれば描こうとしている世界が浮かび上がるのか、それは言葉との格闘だと言えるかもしれない。そのようにして、選び抜かれた言葉・文によって産み出されたのが私たちが読む作品なのだ。

それだけに、文学を読み味わう場合でも、冗長さ、饒舌さに陥ることなく、言葉を惜しんで、選び抜かれた少ない言葉から心で感じるものが肝要なのではないだろうか。子どもに長くたくさん語らせることで、作品の味わい言葉の味わいを薄れさせてはならないのだと思う。

私は、長い説明のような言葉ではなく、湧きあがった短い言葉に、その子どもの抱いたイメージや感情が凝縮される、それが尊いと思っている。そして、何よりも、「音読」をすることがよいと思っている。言葉からイメージ・感情を抱いたら、それをそのまま、作者が言葉を紡いで書き上げた物語の世界を描きだすように音読する。それがいちばんの文学の味わいになると思っている。

繰り返して言うが、どんなときでも、言葉多く語るのがよいというわけではないのだ。

言葉が多くなることによって、説明的になったり、いちばん心をふるわせたことが分からなくなったりするからだ。それ以上によくはないのは誇張的になってしまうことだ。

文学を読むとは、言葉に基づきながらも、言葉にならないところまで想像することなのだから、その想像を歪めてしまったり奪ってしまったりするような言葉の多さに陥らないほうがよい。むしろ、「言葉にならないもの」を大切にする、それが文学の味わいなのだと思う。

私が述べたセミナーで感じた「言葉にならない子どもの声を聴く」の二つ目、それは、なかなか発言できない子ども、うまく話せない子ども、つまり、しっかり話せる子どもの陰に隠れるようにしている子どもの声を聴くことを大切にしたいということだった。そういう子どもたちが、何をどう感じているのか、どんな読みを抱いているのか、それは、言葉として語られない。でも、そういう子どもが作品から受け止めたものは存在しているからだ。

ただ、授業において「言葉にならない子どもの声を聴く」ということは、そういう子どもにも語らせるべきだと考えているわけではない。語ってくれたらそれはそれでうれしいのだけれど、言語になりにくいのであれば語られないままでよい、その子の内に何かが存在しているということを大切にしたいということを言いたかったのである。見栄えよく長く語る子どもばかりに気を取られていると、そういう子どもの「読み」の存在を忘れてしまう、そうならないようにしたい、そういうことを言ったつもりだった。

もちろん、セミナーで見せてもらった授業の子どもたちの姿も、発表してくれた教師の意欲あふれる言葉もとても印象的だった。だからこそ、このことを言っておきたかったのだ。

3 言葉にならない子どもの気づきに存在する素晴らしさ

ずいぶん昔のことになるが、私が3年生の子どもと「手ぶくろを買いに」(新美南吉)という物語で授業をしたときのことである。

その学級に、ほとんど発言をしない子どもがいた。Bさんである。

私のその頃の授業は、多くの場合、まず一人ひとりが気づいたこと、感じたことを文章の行間に書きこむという学び方をしていて、Bさんは、書くことが達者なわけではないが、ぽつんぽつんと感じたことを書けるようになっていた。

物語の中盤、手袋を買うため、子ぎつねが初めて人間の営む店に行くところがある。母さんぎつねから教えられたとおり、トントンと戸をたたき、「こんばんは」と言う。やがて戸が一寸ほど開くのだが、そこからあふれ出た光のまぶしさで、子ぎつねは、人間の手ではないきつねの手のほうを差し出してしまふ。でも、母さんぎつねに教わったとおり「このお手々にちょうどいい手ぶくろください」と言う。それに対して店の人間が言ったのは「先にお金をください」だった。

Bさんは、その「先にお金をください」に心が動いたのだ。そして、「どうして先にお金をわたすのかな」と書き込んだ。

その場面をみんなで読み合う授業になった。その授業の前日、私は、Bさんのその書きこみを目にした。その瞬間、ぱっと光が差し込んでくるようなうれしさを感じた。Bさんは、お使いでよくお店に行っている子どもだった。そのとき、買う品物も見ないうちに、先に金をくれという店はなかったのだ。その自分自身の経験に照らして考えたとき、この書き込みが浮かび上がったのだ。

この物語は、「本当に人間は、いいものかしら」という母さんぎつねの言葉で終わっている。きつねと人間、その断絶された二つの世界。そんな壁を超えて両者が近づいた瞬間、それが子ぎつねが手袋を買ったこのときなのである。「人間はおそろしいもの」と言う母さんぎつね、それに対して「先に金をくれ」と警戒する人間。両者のその言葉が断絶、壁を表している。

ところが、この後、きつねの手であると分かっても、人間は子ぎつねに手袋を売ってくれたのだ。それが物語最後の「本当に人間は、いいものかしら。本当に人間は、いいものかしら。」という母さんぎつねの言葉になっているのだ。

そう考えれば、Bさんのこの気づきはとても重要になる。これまで授業で発言することのなかったBさん、そんなBさんがこの授業で主役になる、そう思うと私はうれしくてならなかったのだ。

この授業のことは、1988年に上梓した『子どもとともに読む授業——教師主導型からの脱皮』(国土社)に詳述している。今、こうして、何年も前のこの出来事を思い出して気づくのは、Bさんにはこのような「言葉にならない声(考え)」が、このときだけでなく日常的にあったのにちがいないということである。そして、それはBさんだけではなく、どの子どもにもあるのだ。しかし、そのような子どもの「言葉にならない声」は簡単には姿を現さない。聴くことができない。そんな子どもの「声」を聴くには何が大切なのだろうか。そこで、『子どもとともに読む授業』から、このときの出来事を綴った部分を抜き出して振り返ってみようと思う。そうすることで、当時は気づけなかった大切なことが浮き上がるかもしれない。

4 子どもがころを開くとき

「どうして先にお金をわたすのか」という疑問を出したBさんは、授業ではほとんど口を開かない子であった。この学級を担当する前年、私の担当する町がBさんの町であったことから、地区児童会で彼女に接していた。その際、登校の反省や夏休みの生活の反省などをみんなで話し合うことがあったが、私は、一度も彼女の口を開かせることができなかった。

Bさんは、両親を亡くし、祖母と兄と姉とで生活するという寂しさを背負った子どもであった。そのため、いつも寂し気で、友だちも少ないように思われた。

Bさんが私のクラスになったとき、前担任の努力で、本の音読ができるようになっていた。と言っても、よく聞かなければ聞き取れないような小さな声でしかなかった。それが、この「手ぶくろを買いに」の授業の頃は、相当しっかり音読できるようになっていたし、算数などで、答えがはっきり分かったときなどは発表もできるようになっていた。けれども、国語の発表だけはどうしてもできないのだった。私は、何とかして、国語の話し合いで、みんなに混じって発表ができるようにしたいと思った。それは、単に話す力がつくとかいうことではなく、それが彼女の自信になり、積極性が出て、多くの友だちとかかわって生活できるようになると考えたからである。

前述した授業の前々日、Bさんが自分から手を挙げ音読した。その読みには、場面の様子や親子ぎつねの気持ちを表そうとする彼女の気持ちが感じられ、わたしはうんと褒めたのだった。

その授業の最後に感想を書いたのだが、そのとき、彼女の鉛筆が動いていないことに気づいた。私は、そんなBさんに、「今日の本読み、じょうずだったよ。そのこと書いてごらん」と話しかけた。

Bさんが書いた感想は、次のようなものだった。

«本よみにあたりました。わたしがよむとき、そして、わたしがよんで、先生が
「とってもじょうずだよ。」
と言ってくれました。わたしは、うれしかったです。先生が、
「もういっぺんよんで。」
といってきました。わたしは、もういっぺんよみました。うれしかったです。»

こんなことがあった翌日、前述した帽子屋の場面の書きこみをした。書き込みが終わると、子どもたちはノートを提出する。そして、私は、全員のノートに目を通す。

Bさんは書くことが苦手だから、いつも書いている量は少ない。この日もそうだった。しかし、読んでいくうちに、あるところではたと私の目が止まった。そこに書いてあったのが、あの「どうして先にお金をわたすのかな」という疑問だったのだ。

普通、どこの店に行っても、「先にお金を出せ」ということはない。Bさんの疑問はおもしろい。ここから、帽子屋の子ぎつねに対する(それは人間の狐に対するという意味になる)思いが読み取れる。わたしはそう思った。

この疑問は、Bさん以外、だれも書いていなかった。それもうれしくて、私は、その書きこみに五

重マルをしたのだった。

帽子屋のところに手ぶくろを買いに行く場面を授業する日の朝、私は、子どもたちにノートを返した。Bさんは、私のつけた五重マルを見てうれしかったにちがいない。そして、そのとき、授業でこれを言おうかなと思ったのかもしれない。

授業が始まり、その場面が来た時、Bさんが手を挙げた。そして、前述したように、彼女の疑問がきっかけとなって、帽子屋の子ぎつねに対する思いが読めていったのだ。

自分の疑問が取り上げられただけでなく、その疑問がもとになって大きな読みに発展していった。それは、Bさんにとって五重マル以上の喜びになった。だから、彼女は、この一時間の終わり頃、今度は、書き込んでいなかったことを自ら発表したのだった。

私は、この日、一つのドラマが起こったのだと思った。何の前触れもなく突然起こった出来事ではなく、前述したような変化の兆しはあったのだが、まさか多くの参観者がいる授業で、彼女にこんな変化が起ころうとは思ひもしないことだった。

もし、私が、Bさんが書いた小さな疑問よりも内容豊かな読み取りばかりを優遇していたら、もし、私が、子どもたちに「書きこみ」をさせていなかったら、Bさんのこの日の変化はなかったにちがいない。

この日を境に、確かにBさんは変わってきた。授業での発表が増えただけではない。友だちの中に溶け込むようになったし、私にも急速に接近してきた。授業を終えて職員室に戻る私の後を、用もないのに、何を話すともなくうれしそうについてくるようになったし、時々、私の家に電話をしてくるようにもなった。二学期最後の日記には、「もっと日記がかきたい」と書き、三学期の最初の日記には「また国語のべんきょうではっぴょうがしたい」とも書いた。

そして、その数日後の日記に、初めて、亡くなったお母さんのことを書いたのである。今まで、そのことには決して触れようとしなかったBさんなのに。

「おかあさんがしぬまえに言っていたけど、なくと、ともだちがいなくなるし、だれもあいてになんてくれないと言っていた。

わたしは、おかあさんのことばかりかんがえて、ないたっていけないとあきらめました。」

相手はだれであったか、それはどんなことだったのかは分からないけれど、何か泣きたくなるようなことがあったのだろう。そんなとき、Bさんの心には、二年も前に亡くなったお母さんの一言がよみがえっていたのだ。

Bさんは、そんな彼女の胸の内を、私に見せてくれたのである。そのことを知って、私は、Bさんのことがいとおしくてならなくなった。

一つの授業の、一つの事実によって、子どもの心が開くことがあるのである。それが、子どもを変える契機になることがあるのである。

私は、この出来事に大きな喜びを抱くとともに、授業というものの持つ可能性の深さに畏れさえも感じたのだった。

(再録にあたって、子どもの名前を「Bさん」とするとともに、一部の語句を修正しました)

5 子どもの声に向き合うということ

今、読み返してみて、Bさんとの出来事は、私にとってはもちろん、日々子どもたちに向き合う多くの教師にとってとても示唆的なことだったと思う。「言葉にならない声」は、人間的なつながりが生まれなければ、聴こえるようにはならないのだ。その「つながり」は、その子どもの「言葉にならない声」の存在を感じながら、それを表出しない子どもの状態や思いに黙って寄り添い、その子どもとの距離が近づき、二人の間の何かが熟すまで、心を尽くして待たなければならないということなのだ。それは、いくつもの失敗を経験してきたからこそ言えることなのだが。

教師は、言葉で生業を立てていると言っても過言ではない。それだけ教師の言葉は影響が大きい。けれども教師は、子どもたちに向けて語ることもよりも前に、「子どもの声が聴ける」ことを目指さなければならない。それは、「子どもの傍らに寄り添える」人になるということだ。

ただ、そのような「聴き方」「寄り添い方」に定式めいたものがあるわけではなく、多くの教師は、いつも、「聴けているのだろうか?」「寄り添えているのだろうか?」と、足りなさを感じてばかりいるのだと思う。私もそうだったし、今もってその足りなさを感じ続けている一人だ。しかし、言い訳ではなく、そう感じ続けているからこそ、「手ぶくろを買いに」におけるBさんのような出来事が生まれるのだと思う。「足りなさ」への自覚があるから、「聴きたい」「寄り添いたい」という思いが心に張り付き、突発的な場面でその思いが持ち上がるのだと思う。

もちろん、どれだけ真摯に耳を澄ませても、完全には理解できない。分かるのは、相手の思いや考えの何分の一、何十分の一、何百分の一なのだと考えていたほうがよい。

だから、大切なのは、どの子どもにも、言葉になるならないの区別なく、学びにとって意味のある気づきが生まれていると信じることだ。それには、教師の目線で考えるのではなく、子どもの側に身を置いて考えなければならない。子どもを信じなければならない。

そして、もっと大切なことは、言葉で語り掛けるよりも前に、「きみのそばにいるよ」という思いを抱くことだ。言葉は大切だけれど、言葉だけがすべてではないのだから。その子どもに心を砕く一人になって子どものそばに居る、それが子どもにとっていちばん幸せなことかもしれないのだから。

最後になるが、6ページにわたるこれだけの文章を書かせてもらえたのは、メールをくれた人のおかげである。その人との出会いがなかったら、これだけの自覚を抱くことはなかっただろう。それこそ言葉になっていないかったと思う。

来週、これまで出かけたことのない地の学校を訪問する。

それは、新たな子どもとの出会い、教師との出会い、学びとの出会いを意味する。

私の人生は、どこまでも、わくわくするような「出会い」を求める「旅」だと思っている。

中島みゆきの楽曲に「ヘッドライト・テールライト」という曲がある。

その最後の一節を、私はよく口ずさむ

「旅はまだ終わらない」……と。